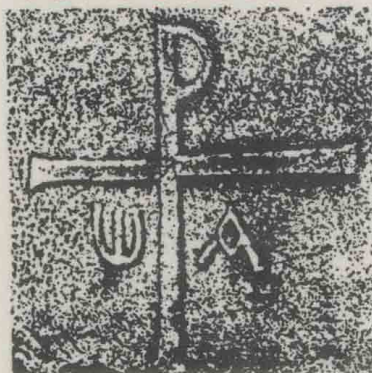


聖 靈 論

アタナシオス
デューモス

小高毅訳

キリスト教古典叢書 15



上智大学神学部編集
P. ネメシエギ責任編集
創文社刊

聖 靈 論

アタナシオス
ディデュモス
小 高 毅 訳

上智大学神学部編
P. ネメシエギ責任編集
創 文 社 刊

小高毅 (おだか・たけし)

1942年生まれ。

1976年聖アントニオ神学院 (哲学・神学) 卒。

1978—1980年 Augustinianum, Institutum Patristicum (Roma)
に学ぶ。

1984年上智大学神学部神学博士。

〔訳書〕 オリゲネス『諸原理について』、『雅歌注解・講話』、『ヨハネによる福音注解』、『折りについて・殉教の勧め』、『ヘラクレイデスとの対話』、『ローマの信徒への手紙注解』 (以上創文社), リュバク『カトリシズム』 (エンデルレ書店)

〔著書〕 『オリゲネス』、『古代キリスト教思想家の世界』 (以上創文社)

聖霊論 [キリスト教古典叢書15]

ISBN4-423-39215-1

1992年12月5日 第1刷印刷

1992年12月10日 第1刷発行

編 集 者	上智大学神学部
編集責任者	P・ネメシェギ
訳 者	小 高 毅
発 行 者	久保井浩俊

定価 2575 円 (本体 2500 円)

発 行 所 株式会社 創 文 社

本 社 〒102 東京都千代田区一番町 17-3

仮事務所 〒112 東京都文京区関口 1-44-7

電話 03-3235-4361

Printed in Japan

著作権者との申し合せにより検印省略

曉印刷・鈴木製本

序 言

万物を超越する唯一の神を信じることは、ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という啓示宗教と東洋の諸宗教との間の主な相違点である。そして、唯一の神が父と子と聖霊であると信じることは、キリスト教をユダヤ教とイスラム教から区別する主な相違点である。キリスト教は、父と子と聖霊の愛の交わりである神をただ超越者として考えるのではなく、子である神が一人の人間、すなわちイエスとなり、聖霊である神がすべての人に内在し、彼らをイエスと一致させ、神の本性に参与するために父と子によって派遣されると教える。キリスト教のこの教えを、究極的なものの超越を強調する啓示宗教と究極的なものの内在を強調する東洋宗教の統合と見なすことができるように思われる。

近代・現代のキリスト教神学、特にプロテスタント神学には、「全き他者」である神の超越だけを一方的に強調する傾向があるが、古代のギリシア教父の神学は、神の超越を認めつつも、神の内在を重視し、その内在によって人間が神の本性にあずかって神化されることを常に力説した。神のこの内在を最もはっきり表しているのが、人間における聖霊の内住である。だから、ギリシア教会の聖霊論が非常に豊かであるということは、驚くに値しないことである。

言 序
四世紀に起こったキリスト教の危機のとき、聖霊の神性を否定する人々に対して、教父たちは、ご自分の到来によって人間を神化する聖霊がかならず真の神でなければならぬことを力説したのである。彼らの著作の内で日本語に訳されたものはまだ一つもない。だから、小高毅師がその内の二つを翻訳してくれたことは、非常に有

意義なことである。熱狂家であったアタナシオスの激しい文体と静かな学者であったディデュモスの穏やかな文体と、その性格は全く異なっているが、二人共同し確信をもって、同じく熱心に、聖霊の神性を弁明している。

この二つの文書の内容は一千六百年前の論争にかかわるものであるが、そこで取り扱われている点は、キリスト教の現代的な位置付けのために極めて重要である。それはすなわち、キリスト教は人間を超越する他者である神を説くだけではなく、人間をご自分と統合させる神をも同様に説いているという点なのである。特に、東洋の国々に生きているキリスト者にとって、このことを意識することは、大切なことである。

「主の霊は全地に満ち、すべてをつかさどり、あらゆる言葉を知っておられる」（知恵の書一・七）。すべての人の心の奥底に現存し、そこで善への希求、美へのノスタルジー、愛への渇き、自由への憧れ、無限の永遠者への希望を引き起こすのは、この神の聖霊である。わたしたちの側に着いた神存在であるこの聖霊こそ、あらゆる困難のただなかにあってもわたしたち人間に信頼を抱かせるのである。

上智大学教授

ペトロ・ネメシエギ

目次

序言	ペトロ・ネメシエギ	i
緒言		三
アタナシオス—セラピオン—ディデュモス		三
四世紀後半における聖霊の理解		一五
アタナシオス『セラピオンへの手紙』		三
第一の手紙		三
第二・第三の手紙		八
第四の手紙		一〇
ディデュモス『聖霊論』		一三
聖書引用箇所注		一八
解説の注		二四

聖

靈

論

緒言

ここに訳出したのは、四世紀後半にアレクサンドリアの二人の思想家によって書かれた、聖霊に関する作品である。まず、それぞれの著者、アタナシオスとディデュモス、そしてアタナシオスの作品の受取人であるセラピオンの生涯に簡単に触れつつ、四世紀後半のエジプト、アレクサンドリア教会の状況、二つの作品の成立の経過、及び、その後代への影響を述べた上で、四世紀後半における、正統派教会の聖霊に関する考えをまとめることにする。

一 アタナシオス—セラピオン—ディデュモス

アタナシオス

アレクサンドリアの偉大な司教、「キリスト教正統信仰の父」と称えられるアタナシオスの生涯は、アレイオス派との論争で彩られており、その四五年間の司教在職期間に五回その司教座を追われ、合わせて十七年間で亡命の地で過ごしている。

アタナシオスが生まれたのは、二九五年頃、アレクサンドリアにおいてである。少年時代のことはいまだ知られていないが、後に、三〇四—三一年の迫害を体験したと自ら述べていることから（『アレイオス派史』64）、少年時代にはキリスト教に改宗していたものと思われる。教育を受けたのはアレクサンドリアにおいてのことと

あらう。

アタナシオスがアレクサンドリア教会で「教会人」としての活動を開始するのは、アレクサンドリアにおいてアレイオスの教説が問題になり始めた頃のことであるが、この時、アレクサンドリアの教会はもう一つの問題、すなわちメレティオス派の問題を抱えていた。これは先の迫害の間に起きた分派であるが、この時のアレクサンドリアの司教ペトロスの、棄教者に対する寛容な態度に反対して、厳しい対処を主張したリュコポリスの司教メレティオスに端を発する分派であり、アレイオスは一時期このグループに属していたとも言われる。

このような状況の中で、三一八年頃、アタナシオスは助祭に叙階され、アレクサンドリアの司教アレクサンドロスの秘書になっている。三二五年にアレイオスの教説をめぐってニカイアで開催された第一回公会議には、助祭として公の発言権はなかったものの、アレクサンドロスの随行員として参加している。アレクサンドロスは生前から自分の後継者としてアタナシオスの名を公言しており、三二八年に彼が死ぬと、アタナシオスは後継者に選出されるが、その選出にメレティオス派は反対している。こうして、アタナシオスは、司教就任当初から、前任者からの懸案であった二つの問題に対処せねばならなかったのである。ニカイア公会議後、反アタナシオス勢が皇帝にはたらきかけて開催にこぎつけたのが、ティルスの教会会議であった。この教会会議は俗に「盗賊会議」とも呼ばれるが、ここで、アタナシオスは、メレティオス派の司教を殺害させたと告訴され——これは全くの冤罪であった——、さらに「首都コンスタンティノポリスへのアレクサンドリアからの穀物供給を阻止する」との彼の発言が皇帝を立腹させたこともあって、追放に処されることになった。このため、アタナシオスは、三三五年の七月一日から三三七年十一月二日までの間トリールに滞在している。

コンスタンティウス帝の治世（三三七—三六一）のアタナシオス

三三七年にコンスタンティヌス帝が死去すると、その三人の子によって帝国は分割統治されることになる。西方

をコンスタンティヌス二世とコンスタンスが二分し、東方はコンスタンティウスによって統括されることになる。三三五年のティルスでの教会會議で断罪され罷免されていたアタナシオスは、この時、トリールに滞在していた。東方を統治したコンスタンティウス帝は恩赦を下し、アタナシオスのアレクサンドリア帰還を許す。彼がアレクサンドリアに帰着したのは三三七年の十一月二三日であった。しかしながら、コンスタンティウス帝の庇護を得たニコメディアのエウセビオスらのアレイオス派によって、三三九年のアンティオケイアでの教会會議で、アタナシオスは罷免され、カッパドキアのグレゴリオスが司教としてアレクサンドリアに送りこまれる。この時、アタナシオスはローマに逃れている。ローマの司教ユリウスは三四一年にローマ教会會議を開催し、ニカイア信条を確認するとともに、アタナシオスの罷免が不当であることを宣言する。この會議にはアタナシオスも出席している。ユリウスはその決定を、アンティオケイアのエウセビオス派の司教たちに書簡を送って知らせている。これを受けるはずの、反ニカイア信条、反アタナシオスの旗頭であったエウセビオスはこの手紙が着く前（三四一―二年冬）に死去したものと思われる。エウセビオス派はアンティオケイアでの大聖堂の献堂式を機会に教会會議を開催、アタナシオス罷免を再確認し、反ニカイアの信条を作成している。ここに至って、コンスタンス帝は教会會議開催を決意し、三四三年にセルディカ（現、ソフィア）で教会會議の開催を決意、それに先立ってアタナシオスをミラノに招き、更にニカイア公會議で大いに活躍したホシウスと会見させている。同教会會議では、アタナシオスの無罪が宣言される。これに対抗して、アレイオス派はフィリッポポリス（現、プロブジフ）に結集。アンティオケイア教会會議の第四信条を確認し、アタナシオスの罷免を宣言する。コンスタンス帝はコンスタンティウス帝にアタナシオスを帰還させるよう働きかけ、三四四年の復活祭に西方の正統派は、アンティオケイアの宮廷に使節を送り、アタナシオスのアレクサンドリア帰還をコンスタンティウス帝に働きかけるなどしている。コンスタンティウス帝は、三四五年グレゴリオスが死去すると、アタナシオスの帰還を許すことになる。アタナシオスはアンティオケイアでコンスタンティウス帝と会見の後、ラオディケイアでアポリナリオス父子の

歓迎を受け、更にエルサレムを訪れてから、三四六年の十月二一日にアレクサンドリアに帰還している。

三五〇年に、ニカイア正統派の擁護者であったコンスタンティウス帝がマグネンティウスによって殺害されると、反アタナシオス派の反撃が再開される。三五一／二年に、コンスタンティウス帝が滞在していたシルミウムで教会会議が開催される。信条が作成されるが、実質はアンティオケイア教会会議の第四信条と同じものであった。また、三五二年には、アタナシオスの良き理解者であったローマの司教ユリウスも死去する。三五三年にコンスタンティウス帝はマグネンティウスを倒し、東西を統一し、単独皇帝となるが、それまで鳴りを潜めていたムルサの司教ウァレンスとシンギドゥスムの司教ウルサキオスが皇帝への影響力を強めるとともに、再びアレイオス派の勢いは増すことになる。

三五三年五月九日、ツムイスのセラピオンを団長とする使節団が、ミラノのコンスタンティウス帝を訪れ、皇帝の前でアタナシオスを擁護する。一方、同じ五月二三日、アタナシオスをミラノの皇帝のもとに召喚する書状を携えた皇帝の使節モンタヌスがアレクサンドリアに到着している。アタナシオスはその召喚を拒絶する。同年、皇帝はアルルで教会会議を開催、ウァレンスが皇帝の名代として出席し、アタナシオスの断罪が宣言される。ローマの司教の使節も皇帝の圧力の下に、それに同意している。カラリスの司教ルキフェルは、ローマの司教リベリウスに働きかけ、新たに教会会議を開催するよう皇帝に要求する。これを受けて、三五五年に、皇帝はミラノで教会会議を開催する。この会議でも、同帝の圧力の下で、アタナシオスの断罪が宣言され、アタナシオスを擁護した司教たちは追放に処される。正統派のミラノの司教ディオニシウスが罷免され、アレイオス派のアウクセンティウスがミラノの司教に選任されたのは、この時である。同年八月、アタナシオスを司教座から追放すべく皇帝秘書官ディオゲネスがアレクサンドリアに派遣される。九月四日、ディオゲネスはアタナシオスを逮捕すべく、アタナシオスが典礼祭儀を執行していた聖堂を襲撃する。アタナシオスはからくも逃れる。ディオゲネスは目的を果たすことなく、同年十二月二三日にアレクサンドリアを去っている。翌三五六年一月六日、皇帝秘書官

ヒラリウスが先鋭部隊を率いた將軍シリアヌスと共にアレクサンドリアに進攻、二月八日夜、アタナシオスが典礼祭儀を執行していたテオナス聖堂を襲撃、信徒ならびに隠修士たちが激しく抵抗し、今度もアタナシオスは逃れ、これをもって第三回目の逃亡生活に入ることになる。こうしてアタナシオスはアレクサンドリアの司教座から追われることになるが、町に身を隠しつつ活動している。アレイオス派はニカイア派の市民の抵抗もあって、直ちにアレクサンドリアを掌握することはできなかったが、同年六月に皇帝の意を受けたエジプト総督マクシムスがアレクサンドリアに着任、アタナシオス派の司教、司祭が保守していた聖堂もアレイオス派の手にわたる。ついに、三五七年二月二四日に、アタナシオスに代わるべく指名されていた、カッパドキア出身のゲオルギオスがアレクサンドリア入りする。それでもまだ、アタナシオス派とゲオルギオス派の間に攻防戦が展開され、一時期ゲオルギオスはアレクサンドリアから身を隠し、アタナシオス派が聖堂を取り戻す（三五八年十月—十二月）が、三五八年十二月に將軍セバスティアヌスがアレクサンドリアに到着し、アタナシオス派は排除される。この時まで、アタナシオスはアレクサンドリアの近郊に潜んでいたものと考えられる。その後、砂漠の隠修士たちのもとに身を潜める。三五九年から三六〇年にかけて、アルテミウスに率いられた搜索隊が、執拗にアタナシオスの搜索を繰り広げ、それはテバイスにまで及んでいる。

この間、三五七年の半ばに、コンスタンティウス帝臨席のもとに、シルミウムで教会会議が開催され、「ホモウシオス」並びに「ホモイウシオス」という言葉の使用を禁じ、アレイオス派の破門宣告の取り消しをもちこんだ信条（第二シルミウム信条）——ヒラリウスがこれを冒瀆と評したことから「冒瀆信条」とも呼ばれる——を採択する。ここに及んで、東西両教会において、正統派の反撃が開始されるが、東方では、三五八年にアンキウラのバシレイオスが主宰してアンキウラ教会会議が開催される。彼は「ホモウシオス」という言葉が聖書に見いだされないで、その使用には反対するが、父と子が「ホモイウシオス」であることを主張した。同教会会議で排斥されたのが、マルケロスとアエティオスであった。アエティオスは、アンテイオケイア出身で、極端なアレ

イオス派アンオモイオス派の代表的人物であった。アレクサンドリアで学んだことがあり、三五〇年頃アンティオケイアに戻り、司教レオンティオスによって助祭に叙階されるが、市民に受け入れられず同地を去り、アレクサンドリアに赴く。ここで彼に師事し、彼の秘書となるのがエウノミオスである——シャープランド (C. R. B. Sharpland) はこの二人のアレクサンドリアでの言動がトロピコイの背景にあると考えている——。三五七年にエウドクシオスがアンティオケイアの司教になるとアンティオケイアに呼び戻され、その庇護を受けていた。三五八年にアンキュラのバシレイオスとセバステのエウスタティオス、キュジコスのエレウシオスの働きかけで、シルミウムで教会会議が開催され、バシレイオスの見解に沿った信条が採択され、エウドクシオス、アエティオス、エウノミオスが断罪され、エウドクシオスはアルメニアに、他の二人はフリュギアに追放される。エウノミオスは、アエティオスの死(三六五年頃)後、アンオモイオス派の旗頭となり、カイサレイアのバシレイオス、ニュッサのグレゴリオスらから激しく論駁されることになる。

三六一年にコンスタンティウス帝が死去し、ユリアヌスが単独皇帝として即位すると、追放地にあった司教たちに帰還が許され、アタナシオスも、三六二年二月二日にアレクサンドリアに帰還し、同年八月にはアレクサンドリアで教会会議を開催するが、間もなくユリアヌス帝によって追放に処され、同年十月二十四日から翌三六三年九月五日まで、再び隠修士たちのもとに逃れ、更にウァレンス帝の治下でも三六五年十月五日から翌三六六年一月三十一日まで、隠修士たちのもとに身を隠している。

さて、このコンスタンティウス帝の治下に、アタナシオスは多くの著作を書き上げている。著名な『アントニオス伝』が書かれたのも三五七年頃のことであるが、アレイオス論争の重要な資料である諸作品、『アレイオス派駁論』(Orationes contra Arianos, 340, 345-346)、『ニカイア公會議の宣言について』(De decretis Nicaenae synodi, 350-351)、『アンイオス派への弁明』(Apologia contra Arianos, 357)、『アレイオス派史』(Historia Arianorum, 358)といった著作が著述されている。そして、『セラピオンへの手紙』が書かれたのもこの時期の

ことである。

「かれの著作は闘争から生まれている。行動家が文筆家であるのはまれである。アタナシウスの哲学的教育は零に等しい。……この闘士は平和的な論議に携わることができなかった。アリウス（アレイオス）派との闘争の進行中に、かれは烈しい論争者であることを実証した。かれの駁論は、鞭打ちの殴打のように襲いかかった」。「かれは戦を快く感じ、手こわく打ちかかり、言うまでもなく利子をつけて打ち返すためには、みずから打撃を恐れなく受ける用意をしている。……かれは説得力があるが、味もそっけもない人ではない。かれは強制しようとはせず、納得させようと企てている。かれは議論し、証明している。何れの場合にもかれは、相手を言いまかそうとはかっている」と、フランスの教父学者アマンは言う。確かに、ここに訳出した『セラピオンの手紙』にも、この彼の論争家としての特徴はくっきりと現れている。しかしながら、カンペンハウゼンが指摘するように、「古い観念と秩序のすべてが、新しいコンスタンティヌスの帝国教会の中で変化せしめられ立て直されんとする教会史上稀有の危機に際して、彼は皇帝たちやまた神学界の有力な代表者すべてを相手に戦うことによって、キリスト教の特質と内的独立を守り抜いたのである。彼の努力の結果、キリスト信仰は厳密な意味で神信仰であり、異教的、哲学的、観念論的なすべての信仰形式から本質的に区別されて残ることを得た。もし彼がいなかったなら、ハルナックの言うように、教会は『恐らく、完全に』エウゼビウス（エウセビオス）のようなタイプの『哲学者たちの手中に陥り、その信仰告白は荒廃せしめられるか、あるいは《光り輝く神性》を崇め尊ぶための帝国礼拝規定のようなものになっていたであらう』。アタナシウス（アタナシオス）は教会が、文化的進歩の理念に巻きこまれ、また政治的権力に誘いこまれるのを救い出した」⁽²⁾ことも見逃してはなるまい。

セラピオン

この手紙の受け取り人であるセラピオンについては、その生涯はあまり知られていない。その生没年は不明で

あるが、アタナシオス及びアントニオスと親しい交わりをもっていたことが知られる。アタナシオスが記した『アントニオス伝』によれば、アントニオスは幻の内に度々セラピオンと語り合っていた(同書82)とされ、更にアントニオスは臨終にあたり、彼が使用していた羊皮をアタナシオスとセラピオンにそれぞれ形見として残している(同書91)。若い頃から下ナイルで修道生活を送り隠修士たちの指導者になっていたようである。アタナシオスが彼にあてた手紙から、三三九年には、ナイル川デルタの町ツムイスの司教になっていたことが知られる。三四年のセルディカでの教会会議に出席し、アタナシオスを弁護し、更に、三五年にはアタナシオスの使節として、他の四人のエジプトの司教、三人の司祭と共に、ミラノのコンスタンティウス帝を訪れ、アレイオス派の誹謗に反論するとともに、アタナシオスを弁護している。アレクサンドリアを追われたアタナシオスと緊密な連絡が取られていたことを示すとともに、不在のアタナシオスに代わってニカイア信条を保守する正統派の要となっていたことがうかがわれるのが、ここに訳出した聖霊に関して論じられる手紙である。ついには、セラピオン自身も、アレイオス派によって司教座から追われている。エピファニオスによれば、三五九年のセレウキアでの教会会議にはプトレマイオスという人物がツムイスの司教として出席している(『パナリオン(葉箱)』七三・26)。このことから、従来、これ以前にセラピオンは死去したとも考えられてきたが、断片で伝えられているラオディケイアのアポリナリオスの『セラピオンへの手紙』から、その可能性は却下された。というのは、その手紙の中で、アポリナリオスはアタナシオスのコリントの司教『エピクテトスへの手紙』に言及しているからである。この手紙の年代は三七一年頃とするのが妥当と思われるので、彼の死は、それ以後ということになる。

アタナシオス『セラピオンへの手紙』

さて、聖霊について論じる一連の『セラピオンへの手紙』は、アタナシオスの「著作中、聖霊に関する最も包括的な叙述を含んで」おり、彼の聖霊に関する考えを知る上で最も重要な著作とみなされるだけでなく、アタナ

シオスの「神学全体のみならず、聖靈論全般の理解に大変重要な意味をもつ」とされる。⁽³⁾

これらの手紙が書かれたのは、『第一の手紙』の冒頭の言葉から、アレクサンドリアの司教座から追われ、エジプトの砂漠に身を隠した時期のことと知られる。また、諸状況から、これは第三回目の追放中のことと結論され、おそらく、三五九年末から三六〇年初頭に著述されたものと考えられている。従って、その手紙で問題とされているトロピコイとは、いわゆるマケドニオス派と同定するのは困難であり、シャープランドの指摘するように、アレクサンドリアでのアエティオスとエウノミオスの活動に起因して生じた、アンオモイオス派の見解に根差した聖靈観とみるのが妥当であろう。⁽⁴⁾

ところで、アタナシオスの『セラピオンへの手紙』は、ベネディクト会士モンフォコン (B. Montfaucon) によつて一六九八年に出版された校訂版——一八五七年にミューの教父著作全集に再録——以来、四通のものとしてきた。しかしながら、『第四の手紙』は、内容的にいつて、1—7と8—23との二つの部分に分かれる。

前半部は、前の手紙を受け継いで、トロピコイに対する反論としての聖靈論を要約しているが、後半部はマタイ福音書一二・二三の釈義であり、ここで解釈される「聖靈に言い逆らう者は、この世でも後の世でも赦されることがない」といわれる中での聖靈は、キリストの人間性に対する神性の意味で解されており、明らかに第一・第三の手紙にみられる同一箇所の解釈とは異なっている。また、ここにはトロピコイに対する言及は全く見られないことから、この部分は前の部分並びに第一—第三の手紙よりも前に書かれたものと考えられる。また、結語と結びの栄唱を欠いた『第二の手紙』は、元来、『第三の手紙』の前半部をなしたものの、つまり、元々、『第二』『第三』の手紙は一つの手紙であったと考えられる。⁽⁵⁾ 従って、本訳では、シャープランドに倣つて、『第二』『第三の手紙』を続けて翻訳し、『第四の手紙』は前半部1—7のみを翻訳することにした。

モンフォコンの校訂版に代わる新しい批判校訂版は、残念ながら、現在まで刊行されていない。オピッツ (Hans Georg Opitz) の手で刊行が予定されていたが、彼の死 (一九四一年) によつて中断されてしまった。